

# 諜者報告から見た明治初期外人宣教師の活動

— 横浜の場合 —

杉 井 六 郎

はじめに

明治四十二年(一九〇九)十月五日から十日にかけて、宣教開始五拾年記念会の多彩な催しが東京神田の東京基督教青年会館で行われた。第一日の劈頭は、感謝会と称するもので、司会は委員長の小崎弘道、イー・アール・ミラーが当り、その式次第は次の通りであつた。

讚美歌

聖書朗読 ジェー・シー・デビソン (J. C. Davison)

祈 禱 小川義經

音 楽

演 説 (廿分) ジェームス・バラ (James Ballagh)

讚美歌

演 説 (廿分) 本多庸一

讚美歌

感 話 (十分宛) 村上俊吉

デー・タムソン (D. Thompson)

稲垣 信

ヘボン (J. C. Hepburn) 博士とウィリアムス (C. M.

Williams) 監督との書面朗読

讚美歌

祈 禱 デー・シー・グリーン (D. C. Greene)

頌 歌

祝 禱 奥野昌綱

「開教五十年記念講演集附祝典記録」によると、バラは最高長老として、開会演説を、タムソンは「障書の除去」と題して感想を、それぞれの立場で五十年を回想したわけであった。

バラは文久一年(一八六一)十一月(陽曆)夫人とともに神奈川に來航した米國改革派の宣教師であり、タムソンは、バラにおかれること二年、文久三年(一八六三)の五月(陽曆)、同じく神奈川に來着した米國プレスビテリアン派の宣教師であつた。

当時既に日本に來ていた宣教師には、米國監督教会のジョンソン・リッキングス (J. Liggins)、チャンニング・ウィリアムス、プレスビテリアン教会のヘボン夫妻、改革派のブラウン (S. R. Brown)、シモンズ (D. B. Simmons) 更にフルベッキ (G. P. Verbeck) 等

が安政六年（一八五九）に、翌年四月（陽曆）には自由バプティスト派のゴープル（J. Gould）が来日してをり、殊にタムソンの来日の頃は、ブラオン、ウィリアムス、ヘボン、ゴープル等初期宣教師グループとも称すべき人々が、続々横浜に移りあつた頃であつた。爾來バラとタムソンは既に五十年、なお鏗鏘として布教につとめる老宣教師であり、ブラオン、フルベツキは既に相續いて逝き、ヘボンも亦本國で老軀を養うとき、かの兩人は日本のキリスト教界にとつては、正に草創の人々であつた。

本稿はこうした草創期の外人宣教師達の活動に、新に渉獵した史料をもとに光をあて、開教の百年を迎えた日本のキリスト教史考察の一助としようとするものである。

なお、紙幅の都合から本稿は横浜の場合に限定し、東京、大阪、長崎、函館等の場合については別に論ずることとする。

### 一 耶蘇教諜者各地探索報告書について

明治初年といつても、まづ、ここで取扱う年代は、後述の史料制約にもよるが、明治六年にキリスト教の禁止がとかれた、ちょうどその前後に焦点をしばつて考察を加えることを最初にことわつて置く。

さて一般に外人宣教師の活動について考察する場合、その手がかりとしては、既にいろいろな資料があるわけで、大体の動向を知ることには先人の諸業績によつて、可能であるけれども、それぞれの資料のもつ制約を考慮すると、なお、そこには、いくつかの問題がよこたわることには否定できない。例えば、各教会で出された教会史であるが、そこに記述された外人宣教師の活動には、おのづから附会

が多く、いわば讃仰的であつて、あるいは記念誌的な叙述が多いわけで、それから、外人宣教師達の本當の姿を見ようとすることは、相當の注意を払わなければならぬ。また、各個人の略伝とか、或は伝記全集類が出版されているものもあるが、これも亦同様な注意を必要とする、そのうちでも、日本人伝道者として大をなした人々の全集、殊にその追想・回想あるいは、見聞談等にあらわれた宣教師達の叙述に於いては、それらの人々の眼を通してみた歪みばかりでなく、記憶のあやまりも多く、深い注意が必要であつて、これらにあらわれた寸言尺語を以つて、外人宣教師達の人柄や活動を律することは、大きな「ズレ」の生れる危険性をなしとしない。そうすると彼等の行動をほんとうに評価しうる、信憑すべきものは何かとということになるが、それには、まづ第一に、彼等自身が本國のミッシヨンに報告したレポート類があげられるであろう。彼等自身の言葉、それは當時の日本の社会に対するある態度のもとに、虚飾なき報告がなされていたと見てよいもので、その行動を知る上では、最も信頼すべきものとして考察を加えてよいものであつた。しかしながら、残念なことには従来この方面からする初期キリスト教の研究は、史料操作上の都合もあつた様であるが、まことに寥たるも々のであつた。

筆者も同志社大学神学部竹中正夫教授の力添えによつて、同大 学オーティス・ケリー教授からほんのその一部を借覽しえたわけであるが、何分それは多年次に渉る龐大なものであり、なおかつ、その読解にも微力では到底短時日のうちになしうるものでなく、その持つている史料の価値に驚きを以つて接しつゝ、まだ充分これを紹介、または利用するまでに至っていない。

しからば、われわれの依拠し、それを以て真実に迫りうるものは外にないかというに、ミッションへの報告にも比すべき史料が、外国文獻、史料によらず、現に日本にも存在する。それは量の上では決してミッションへの報告に對比できるほどのものではなく、かつ又、累年の多寡にも大きな差違があるけれども、いわば第三者の立場に立って、しかも教会活動の内部奥深く入り込みながら、丹念にその教会活動全般を刻明に報告した「諜者報告書」というものがあげられよう。

本稿においては、この諜者報告書をもとにして、初期伝道に従った外人宣教師達の活動を考察してゆくわけであるが、まづ、その諜者報告書について明確にしておきたい。

さきに、新たに渉獵した史料と述べたのは、この「諜者報告書」であるが、そのうち一部は、かつて小沢三郎氏が「幕末耶穌教史研究」(昭和十九年刊)で紹介・報告されたことがあった。ところが意外にもその史料のもっている重要性は従来見すごされてきたものであって、ほとんど注目されることがなかった。

該史料は、正式には「耶穌教諜者各地探索報告書」(早稻田大学大隈といひ、明治四年の十二月から六年の四月にかけて、それは丁度キリスト教の解禁の前後にあたる時期であるが、足かけ三年にわたって、敎府の派遣した豊田道二、正木護、安藤劉太郎ら約十二人の諜者の提出した探索報告書であり、和紙、毛筆書きの冊子で、すべて二十三冊に及ぶものである。

極秘の探索者を派遣して諜報を集めたのは、なにもキリスト教にのみなされたわけではなく、適時必要に応じて各方面になされたわけであるが、明治四年七月に弾正台が廃止されるに伴い、彼等は太

政官に所属した。彼等は、明治六年の十月に、「西教蔓延防止困難ニ付取扱掛及諜者一同免職願書」(大隈文書目録)を提出し、それが聞届けられて、一応組織的諜報活動は止められたようである。彼等は骨肉の關係も絶って盟約した人々であったが、それぞれに階層もあり、俸給は月に平均十三両、最高で二十両を支給されていた。彼等は相互にその任務を了解し、諜報を確実につかむために、殆んど受洗して教会の組織の中に完全に入り込んでしまつてをり、はては公会設立の重要メンバーに名を連ねるほど完全に偽装し、偽瞞しおおせていた。したがって、その報告書は教会活動の全般に涉り、当時の動向を窺いうるうえで最も好箇の史料というべきで、正に手にとるごとく報告している。

諜者の出自について特徴的な現象は、概ね真宗の僧侶であつて、いはば妖教破邪の信念にもえた人々であつたことである。真宗の僧侶が多くこの仕事に關係したことは、近代仏教史の上でも極めて注目すべきことであつて、神道國教化を推進しようとした政府が、逆に真宗の僧侶を利用しようとした面も考慮されるが、また、全く反対に、真宗僧侶の新政府の宗教政策に迎合した人気とりの役割を担うものであつたかも知れず、この点は別に考えたい。ただ、彼等はミイラ取りがミイラになつた例はなく、その後半生は、その前歴の故に前面に出ず、其後香として消息を絶つた人が多く、その後の動向は究明が困難である。

## 二 諜者の立場

さて、横浜に「異宗搜索諜者」として派遣されたのは、ともに真宗の僧侶である、上等諜者の安藤劉太郎、下等諜者の正木護であつ

た。本稿はしたがって、彼等兩人の報告書を通して、以下考察を加える。

彼の兩人の略歴は、既に前掲の「幕末明治耶穌教史研究」に詳しいので、之に譲り、まづ、彼等自身の立場を、その報告書の表白から明らかにしておく。正木護は、「憂情弥益度々本願寺に至て之を涙告し、東西に同志を求め、南北に有名を尋、防邪を唱ふ事已に十有余年」、「御一新後(中略)異宗排除の命を報せらるる機会を得(中略)政府に建言を奉り、直ちに、本願寺に至、大に防禦の一策を企てた人であり、安藤劉太郎はやはり、「御一新の際に当て、真宗五派一致憤発して、肥前浦上村の異宗徒説論の一挙、蒙官命度旨出願(中略)東本願寺内命に依り、殊に官許を得て弁事伝達所より御印鑑を賜り、崎陽に赴き(中略)一昨明治三年秋当港(割註筆)へ来た人であるが、正木の場合には「恐多も我國民、皇國に在て、皇道の非を挙げ」とか、「乍恐今日少も皇道之教る処なく唯邪教之弘まる耳にては」、「皇統連綿之御國威も立せられ難く相成候は必然之理」と憂えるのであるが、皇道の内容については、自分自身の考えは表白されていない。勿論政府の雇われの身であることや、政府への探索報告という性格にもよるが、愛宗護教の立場は前面に出ていない。しかし、彼等が「搜索の義は、勿論要用といへども、豈搜索耳にて防禦と云へけんや、若彼巨艦大船を以て襲うときは、台場兵器を以て、之を禦くべし、今法教を以て襲ときは、教に非れば、何を以て之を禦くべけんや」という本質的なまことをいた観察はなされている。また維新政府の対仏教政策に対しても、「近時僧徒御新政府の御趣意を誤、唯排仏毀釈等の流言を信し却って御政度に粗糲するの徒少からず」と政府の立場にたち、「是迄御國內巨多の神社仏閣

ありといへども、其要所を残し、盛に教諭の人財を遣はされ、無用の社堂を廢せられ、社人僧徒共□人財を擡挙し、游□無学にして教諭の任に足さるものは、悉く放逐し、縦令下賤の輩たりとも、人財を拔過し」、「内、教を以充実し、外、搜索を微細にせば」と、極め積極的な施策も考えている。この様な表現からすれば謀者には陰惨な影はうすく、むしろ、自覚に燃え、「御内命を奉載し、千百万辛、俱に死地に入て、彼が挙動を注視し、日に尽力する処なり、然れども、右は畢竟、枝末の防邪にて、根本防邪の廟議確定せざれば、枝末に在て、何程尽力するとも、何所に実効の顧るべきや、併し謀者は千里の外より彼が情実を奉告するの伝信機械なれば、謀者なくんば廟堂の君子、何を以て防邪の方向を立て給はん」と意識していた。しかも、安藤劉太郎の報告によると、その宣教政策の根本方針というか、殊に大教宣布の神道復興に關しては、「敢て、彼徒(筆者割註教者)を誹議するにあらず、我邦内に眞の神道顯れざるを悲しみ、且彼徒の未だ聖靈に恵れざるを憐む、依て耶穌教の國家の理非を善く質すことを知らしめんと欲し、自ら固陋を忘て、鄙懐を述るといへども、これを人に示し、誇らんとするには非」と言つて、正しい反省をされていた。しかして、明治六年二月、切支丹禁制の高札ごとかれると、彼等は正式には存在の理由を喪失することになったが、「積年其巢窟に入り肺肝を摧き尽力致」、「只今にては西教會中屈指の厚信家に算入せられ候程の族も有之」ながら、「内願すれば、時勢の力に及はざるあり、外には教師慰撫優渥の恵を沾るありて、進退究迫、情実看過し難」く、一同速かに職務をとかれることを歎願したわけであった。

そうした推移のなかで、彼等が、宗教に対決するには、宗教をも

つてしなければならず、わが神道興隆の要を明白につかんでいた点は、しつかり本質を見極めていたということが出来る。しからば、次の問題として、こうした彼等の眼には外人宣教師等はどの様に写ったか、また、彼等の働きをどの様に、或は伝えていたか。

### 三 宣教活動の動向

#### 1 外人宣教師

外人宣教師は本国の各ミッションから派遣せられた人々である以上、各自の成績をたかめようとする気構えは、日本に於ける信教の自由、伝道弘教の自由が獲得された時期の前後では、おのずからその性格を異にした。即ち、明治六年の二月以降、謀者達は、あらためて、彼等の真摯な伝道・布教による教勢の普及化に睨目するばかりであった。その年の十月、一同免職願書を出したとき、彼等は、政府、官員の単なる時世便乗の傾向と比較して、「頃日に至り一層浸潤の勢を増し、各派教師皆本国教会の後援を募り、互に先を争ひ、弘布の術を尽し居、一今東京、横浜、長崎、宮城、函館等所在西教会を創立し、且暮勉力して以て各派宗徒を誘導する事甚た務め、太た急なり、其口実たるや、曰く、今日本政府明かに制勝を撤し、囚徒を放免せり、是即ち黙許の徴なり、此機に投じて、各派必ず先を争て布教すべし、若し、或は他の一派に先入せらるる時は、則自宗の布教施す所なかるべし、然る時は、数年本国教会より莫大の経費を出し、吾教輩を遠く日本に來たせし目的齟齬し、随て吾儕に於ても、其職を竭さざるに坐して、讒を教会に得ん事必せりと、此に於て夜白間断なく、一に弘教に汲々」とつとめ出した宣教師に、

「一動一静も悉く耶蘇天主の命に帰し、担当畢命を期し、誠心弘教を任」とする烈帛の気合を認めている。

奔流の様に走りだした、各派宣教師達の真摯な気構えは、敗者であり、消えてゆかざるをえない謀者の眼には、鋭く、かつまた印象的であったと思われる。

勿論、こうした各教派別の個別の動きは、キリスト教解禁直後の特徴的な現象とすべきであろうが、いはば、信教自由獲得の共通目標に向う気組みとは、また別のものがあつたから、謀者をして、この様に言わしめたと見られよう。

後述の様に、各派の宣教師間には、摩擦・軋轢も不可避のものであつたと考えられるが、以下次第的に、兩人の報告から宣教師達の活動をみると、

明治五年一月九日報告（正木）では、横浜の開化のこと、別に耳目を驚かすほどのことはないが、「彼洋教之盛なる事は、寔に言語に絶し、愕然之次第」といって、「他の教師は未知候得共、バラ、ピヤール（女教師、キダ（女教師）何れの学校も盛なる勢」で、バラは妻と小川廉之助（義経）兄弟の家族も勧誘して学校を経営し、ピヤソン（J. H. Pearson）女史の学校は、午前は男子四十二三人、午後は婦女子老幼とも二十人ばかりで、「日々バイブルを讀せ、歌を唱へ、神を禱する事」がさかんであり、キダー（Miss Mary Kidder）の学校は女子ばかりで、やはりバイブルを主とし、安息日には特別に集會を催している。ピヤソンのところへは、安息日の夜、バラが來て聖書の講義をし、男女数多く集まり、バラは日本語で懇々と話すことが報せられている。

こえて、二月六日付報告（正木）で、従来安息日の夜バラがピヤ

ソン学校に来て聖書の講義をしていたのを、「此節に至っては、数々臨時夜会を開、右学校生を始め、婦女子、或は商人等を引入るの策を企て候、商人職人日雇等に至迄、一度教師之屋敷内に踏込候者には、一句なりとも、教されば帰さずという勢相見候、バラ邪弁を以て、一度説ときは、十に八九は必ず伏する色相見候、実に彼が宗門の為に身心の勞を厭はず尽力」(中略)「乍敵可感程之事」と、バラの伝道の氣構えの鋭さに感歎している。

なお、後述するように二月二日は、公会設立の日であり、長老には、既に受洗していた小川義綏がなり、執事には、仁村護三がなつて、日本基督公会はバラを仮牧師として発足したのであるが、正木の報告によると、バラの熱誠は云々しているが、日本人側の主体的動きは、あまり著しいものを認めていない。

さらに三月十四日差出の報告(正木)によると、バラの教会は追々人数も増加し、学校では、狭いので、もとヘボンの治療所としていた、海岸三十九番の家(海岸教会)を借りて、聖書講義を行なうようになったが、この月の七日、安息日の晩餐の会に、まことに珍らしい人物が顔を出している。謀者の報告には、「米国耶蘇教師凡そ年齢六十余斗の者」として、名前をのせていないが、前後から推して、ウイリアムス (S. M. Williams) であることは明瞭である。(七月二日付報告(正木)には名前をのせてある。彼が説教のなかで、「今

爾等に天父と耶蘇の名によりて命し度事あり、此教を盛大に弘めんと思はば、此横浜耳にて働るより、早く方々に出、田舎間より、重に開べし云々」と述べている点は、極めて注目すべき指摘であつて、彼は現にシナで体験していることを述べたわけであるが、「此咄を聞き、バラ、長老諸弟子等大に喜へり」としているのは、さら

に伝道弘教の方途に思い当るところがあつたとしてもよいであらう。しかも、在日宣教師とシナ駐在宣教師との連繫も留意すべきである。

さらに、八月二十四日付報告(正木)によると、横浜で各派合同の宣教師会議が行なわれた際の報告が見える。

「此度横浜に於て東京大阪神戸長崎の耶蘇教師會議致し候に付、八月二十日、安息日、教会一同来集致すべしと長老小川廉之助より、態と申来候に付、乃ち下港仕候処、大阪よりギウレキ、J. T. Gulick (筆者補) 以下同様) 神戸よりグリーン、デーベス、ペレー医者 (J. C. Berry)、長崎よりスタアード (H. Stout)、横浜にてブラオン、バラン、タムソン、ウォルフ (C. H. Wolf)、ルーメス (Loomis)、サイレス (E. Syle)、ヘボン (翻譯) (東京丸ルロデス C. Carothers (原註、鉄徳洲に寺あるゆへ、安息日には他出すること能はず) 支那教師一名、其他外国人男女教員、御国内教会の徒と共に、晩餐を守る、盛なる勢なり、(傍点筆者)

二十一日午後第二半より會議を始む、初に歌を唱へ、次にはハイフルを誦、祈祷をし、神に約て而後事を議す、第六字迄議し、終て復、神を禱る、同夜七字半より十二字迄、二二日二字半より五字迄、同夜七字半より十字迄、何れも前後の式同じ、議長ブラオン、執筆ギウレキなり。(中略)

バイフル翻譯の事、御国内在留の教師中にて、一宗に一人つ、翻譯者を人撰することを議す、ヘレスピテレヤンにては、ヘボン、リーホンスにては、ブラオン、カンクリゲシナンにてはグリーン、イツヒストファープにては、ウリヤムス、エンソール兩人の中、定め度由なれども、何れも出席なきゆへ、定め難き由、此宗

サイレスと云教師あれども、ミシヨネールに非るゆへ、是等の事を定る事能はざる由なり。

フラオン、ヘホン兩人の翻訳にて馬可伝の一冊は成効し、此度教会中へ施本致候、馬太・路加等追々出版の由。(中略)

御国内に於の教会規則の事、各宗教会に於て、規則の左右あり、追々日本人、教会に入る者あり、之が規則と定るに、何れの宗によつて、然るべきか、其誘入する教師にて一宗々々の規則を立つべきか、各宗合して日本の一教会規則を説くべきかを議す。

之には種々の議論ある由なれども、先づ何宗の規則ともなく、日本の一教会と云事に決せし由、タムソンより承る。然れども此論は、この度確定と云事には至らぬ由なり(下略)

これによると、惣計十四名の宣教師ならびに、その他外人教師及び日本人若干名の合同会議が開かれ、日本伝道に関する重要な論題が問題となつた。八月二十二日付報告(安藤)のそれと比較すると、会議の運営及び聖書翻訳の人選等に多少、精疎の差違があり、例へば、「約書和訳之人撰」と題して、「右者波羅暗宗分派之内ブーレースピーチーリヤーンニス派に在ては、プローン、ヘボン、エビー・ジョーパリーヤーンニス派に在ては、エムソール、ウィイヤム、インデーヘンデーシート派に在てはグリーン已上之五名選挙に相成候」と伝えて、宗派区別及び担当の決定、その方法がやや相違し、教会規則に関しては、殊に横浜教会の規則を問題にした様に書かれていて、

「横浜教会 所屬 右者地理人情に合し、新日本教会之一規則を施設し、外国何所之教会にも繋屬不致方便宣之条相決し候」と報じていることである。しかし、両者の報告に共通している

ことは、各宗派宣教師が、布教に協心、一致して活動を展開しようとした雰囲気や底に流れていることを、はっきり見極めている点、しかして、「法教密伝の方法」に関して、「病院を起立して、竊に人望を奪ひ、生徒を教育して、遂にバイブルを讀ましむる之策」を当面の課題と考え、それは「各宗教師其許にて是非捨て」という程度で、各宗派が、日本伝道に関して、完全な協力一致体制をとるのではないが、聖書の和訳も共同で、という動向が、宣教師間にあつたことを認めていることであつて、これは、初期外人宣教師活動の一大特徴となしえよう。

ただ、その際、彼等宣教師達が、日本に於ける信仰自由の確立獲得という様な問題を、そして、そのための実践活動を云々していなものは、片手落ちの感を抱かせるけれども、弾圧、抑留事件の際は別として、その交渉は、駐在外交官に任せ、彼等は日日常々として、伝道の礎を築いてゆく、地道な方策がとられたと見るべきである。事実、当時澎湃と勃興した洋学熱は、全国各地から、有為な青年の東京・横浜に游学するものが多く、彼等に対する弘教・伝道は、宣教師達が「法教密伝の方法」を考えたように、法的根拠なくして実は可能であつた。

しかし、こうした宣教師達の「法教密伝の方法」は、当時の日本人側からすれば、勿論純粹な信仰を求めて、宣教師達に接触する者もあろうが、数多くの人々は、教育≡実学≡語学という実利実用の学を求めて、彼等のもとに集まつたわけで、そのうちには宣教師達の構想通りに、やがて信仰の生活に入つていった者もあるが、要するに求めたものは、信仰でなくして、実利的なものであつた。

そうした実利的な思惑を根底としていたから、宣教師達の現実の

生活の質素なのに驚き、はては、ケチだとけなす、いはば思惑はずれが生まれたが、(小沢三郎氏「明治初年に於ける横浜」)謀者の立場からすれば、「横浜居留の教師共如是狡猾奸謀あるを往々に耳に振りたり、け様の振舞を見て、此教の不善なる事察知すべし」という他人の会話も丹念に報告し、(明治六年四月三十日付報告)「妖教破邪の性格の濃いことも当然であった。

しかし、宣教師達の生活信条がケチであり、狡猾だとまでいわれたことの裏には、事実として、多少その様なことがあったとしても、当時彼等に接した日本人一般の認識にも、欠けたところがあったと思われ、宣教師の多くが、アメリカから来日し、彼等の生活倫理に、清教徒的な質実勤勉な精神が流れていたことも考慮しなくてはなるまい。

宣教師達の布教・伝道の気構え、各宗派間の連繋、伝道の方途、生活信条等は以上の通りであるが、最後に宣教師間の緊張関係について、謀者の報告を見ると、明治五年正月の報告(安藤)は、「横浜奇談」とされていて、まさに特異な報告と銘うったものであるが、これには、バラとゴープルの対立関係がのせられている。

それは、「彼教師等は、よく魔鬼の撒、但となり、巧に日本人を誑惑す、然れども、彼等互に誑惑すること能はざる歟、将又、彼等奸黠の雖、其齏を脱する歟、此等の一近事は、即ち彼徒の真面目にして、所謂撒、但互に分争するものなり、其教何以立哉」という見方をしている、宣教師達の内面を暴露するものだ、という観察をしているが、事の発端には、いうまでもなく、日本人が介入し、そこには、はしなくも、宣教師達の治外法権的な特権意識も窺いうるの、煩をいとわず引用すると、

(前略)加州金沢県下某村の貧民、忠八なる者十余年前、妻子を携へ横浜へ転住し、日に傭作して以て生計となせり。而して凡そ三年前より教師ゴープルの家に工役し、孜孜怠らず、勤て教師に仕へり。教師亦深く之を憐み、遂に三月頃より其館内の一空地を貸して自ら居室を造らしめたり。而して税を取らず、此に於て尚空地あり、或日忠八教師に乞て曰、奴輩に若干の余金あり、願くば主の閑地へ一小借家を築き、以て市人に貸すことを得せ令めば、幸い甚し。教師速に諾せり。遂に七十金を出し、一店を造り以て結髪者藤吉なる者をして居ら令む。即ち敷金二十両、屋賃一兩二歩なり、而して彼が業、日に繁栄し、殆ど市中の結髪者を圧する勢あり。依て同職の爲めに、異館の故を以て遂に其業を禁せらる。(榜点筆者)

此処に於て藤吉甚だ困却して、忠八と謀り、俱に此事を教師に訟ふ。教師曰、汝等若し名分を改め、我が家僕とならば其難あるべからず、縦ひ難あるとも唯我に關すべし、汝等に在て更に愁なし、依て忠藤二人に試に証書を作り、仮に主僕の約をなす。

藤吉又曰、凡そ西洋の国習は、毎七日に安息日と稱し、各業休息せり、然るに奴輩は素と貧業にして、彼国習を守り難し、願くば主之を恕せよ。教師亦敢て否せず。

爾後藤吉再び復業することを得て、安然生活せり。或る安息日に教師彼が店頭を過ぎ、笑話雑蕩の声を聞き、憤怒に堪へず、忽ち突入して、毀罵打蹴、頗る暴行を恣にす。依て藤吉等其他一座の客、みな驚愕して、奔出せり。教師再び忠八の宅に突入し、其狂暴亦此の如し、忠八亦逃る、而して教師帰宅して自若たり。之に依て、忠藤二人深く愁となし、遂に此を教師バラに愁告

す。バラ快く諾し、一書を授け、痛くゴープルを諷む、ゴープル此書を見て怒ること甚し。遂に両教師隔然絶交して、互に仇視するに至る。後ち彼国教会の徒、此事を聞いて、深く日本へ対し、波瀾暗の教恥とならんことを恐れ、彼等をして和合せんことを謀る。然れども彼等強く私情を張り、容易に屈すること能はず、教徒亦退く。

然るに、彼忠藤二人の奴輩は、家宅を失ひ、各其業に就くことを得ず、甚だ困却し、日夜バラに泣迫す。依てバラ竊に金三十円を彼奴輩に与ふ、奴輩亦バラの恩賜を喜び、或は道路に於て、公然バラを褒揚し、痛くゴープルを貶す。ゴープル此に於て切齒に堪はず、遂に十月中旬、一書を作り、バラの旧悪教条を挙て、彼国のコンシユル館へ讒す。其後教師等日に役館へ召出され札明責問殆と十度、後ち同月二十九日、裁決の日に至て、憐むへし、バラは二百弗の罰金を奪れたり。而して、ゴープルは頗る狡猾なる哉、其二百弗を船賃として、十一月十二日出帆帰国せり。(下略)

さて、ゴープルが詭激な性格であったことは伝えられているが、(日本基督教史) 個人の性格は別として、髮結同業者が、営業禁止を結束して申出でいたのに対して、自分の家僕となつたならば、有無は言わせぬ、という立場を明瞭に打出した点は、表面上は、彼藤吉なる髮結い人の生業を保護し、生活を守ることにあるが、内実には、外人のもっている特殊な特権を楯にして、いはば、髮結い仲間の従来と同業組織等眼中に置かぬ特権意識を濃厚にもち、伝道・布教の最大の武器として、それを最大限に活用しようという態度が、はっきり認められるわけで、ゴープルとバラの対立関係の如きも、その様な特権の行使される際、その庇護を利用しようとするある日

本人——それは、また、伝道布教上の布石となつていく性格をもつものであるが、——を教勢拡大線上の天王山とする角筈であるという見方が成立する。即ち、外人宣教師間の個人的確執、或は摩擦も無視することはできないけれども、各宗派間の宗勢開拓線上の争闘戦的性格も亦否定できないであろう。

## 2 日本人の動向

この様な外人宣教師の動静に相応する日本人の動きは、それが表裏一体となつて、うごいて以上、また当然問題となるが、諜者、即ち彼等自身もそのなかの一人である当時の日本人信者の動向を、どの様にみていたか、次にその点に視点をうつすと、

明治五年二月六日付報告(正木)には、先述の様に、その月の二日の、バラ学校において行われた記念すべき記録が報せられている。いうまでもなく、それは、日本基督教会の設立の日であり、篠崎慶之助、竹尾陸郎、佐藤数雄、戸波捨郎、押川方義、進村漸、吉田進好、大坪正之助、安藤劉太郎等九名の受洗、小川義綏の長老就任等記事そのものは、簡単であつて、別段公会設立にいたる白熱化した宗教感情の勃興など(日本基督教史)は知る由もないが、「此の度断然公会之基本相立、長老なる者厳に鑑察し、日夜に教を敷、勢前に倍して盛也」という言葉には、巨細な報告を同僚の諜者、豊田道二と、その日受洗した安藤劉太郎の口上書に托して、いわば感慨を込めた報告であつたと思われる。同日受洗の際、小川義綏と試問人の一人として諜者報告にあげられている仁村護三(仁村守三)が、やはり真宗の僧侶であることは、既に大正十一年十一月の「福音新

報」に報ぜられていたが、謀者との関係はどの様なものであったかは、判明しない。

こえて二月十三日付報告(安藤)は、設立当初の日本基督公会の内情を知るうえで、極めて注目すべき記事である。

去る二日曜日已来彼宗公会も日々盛なる勢にて御座候処、一日バラ并に小川輩、欠席の砌、会内の宗徒戸波捨郎なる者、集会上に於て、突然云く、六十六巻之両約書は耶和華神之真言と云と雖も可なる処もあり、又不可なる処もあり、一概すべからず、可なる処は信用すべし、不可なる処は、捨るも亦可なり。第一耶穌復生之説は我輩難信得也云々。

於是大坪庄之助議論紛紛すれども、遂に被難□候、其後公会に於て、右戸波処置に付、数度集議之上、右等の件は長老之職掌に候得者、小川より竊に説論可致義、至当之事と一決致し候。然るに佐藤數雄并に彼戸波之兩人は過日受洗は致し候得共、元來強信之徒とは小川輩も不信居機會へ右件突起候に付、小川も余程逆鱗之舐に相見候。(下略)

報告書に見える戸波捨郎は、のち郵船会社に入り(日本基督教會史二八頁) 牧界を去つた人であり、彼と議論をたたかわした大坪庄之助(正之助)は、小川義經夫妻きん子の弟で、義經妹すま子を妻とした人である(前掲書二七、二九頁)。仮牧師であるバラや、長老小川義經の留守の際、信仰信条について論戦し、戸波はその際、復活の不信をまで表白したことは、二三日前に受洗したばかりの九名のグループの一人であるだけに、佐藤數雄(一雄、戸波とは同郷人、のち、通信省管理局長前掲書二八頁)の信仰とともに極めて重大な事柄であつて、謀者の立場からは、「公会分争の原因に相成」、「頗る近來之愉快」と言つのである。

が、当時の日本人の入信の厚薄を知るうえで、外人宣教師と入信者とのつながりの度合、また、つながりかた等と連関して、大きな問題を提起することになる。

しかし、その様な問題をほらみつつも、宣教活動は、日ましに拡大していったことが、三月十四日提出報告(正木)にはのべられている。そして、謀者、正木護も「止を得ず近日洗礼を受けるに至るべし」と報じ、公会において、日夜となく、堂々と祈禱文を唱へ、洗礼、晚餐の礼が行われる形況は、「昨冬を以当早春に比すれば倍増の勢、早春を以て今日に比すれば復倍増す」と言っていた。

かくて謀者正木は、三月二十一日、桃江正吉という名前で、杉山孫六、朽木鐘、熊野雄七、湯浅久兵衛、伊東友賢とともに、受洗したことが、三月二十二日付報告(安藤)にのせられている。ただ、同報告によると、正木報告と多少情況の見取りに懸隔があり、安藤は「当日(筆者註三月二十一日)者勿論近來教会之勢過日受洗之前後に比すれば、入邪之人數者右様(筆者註左)増加致候得共、惣して、彼に出没致し候輩之人氣上に於ては、何となく蕭寂たる様注視仕居。」と述べているが、これは、彼が同報告のなかで、いう様に、宣教師が戒律(規則)を嚴格にし、また、その説く教理に君父を蔑視する傾向があるのを、有識者が愛想をつかした結果とするよりは、公会の設立後約一カ月、たかまつた宗教感情の横ばい、安定期に入ったと見るべきであらう。

しかれば、教勢の拡大、信者の増大という傾向にありながらも、長老小川義經には、次の様な心配が脳裡から去らなかつたと思われる。その第一は、

「近來教会之兄弟追々各所江散在し、横浜教会も春來に比すれ

ば、殆ど衰微之勢あり、就中奥野又右衛門、福島屋久兵衛等凡そ家族在之候五六輩を除之外者、皆馬合之書生にして、一定の住所も無之、後日は何所江散在候哉も難計一

と歎息するもので、来会する学生を彼は馬合の衆と見定め、彼等の心底に、信仰によって、やがて結盟すべき要素を余り期待してはいない。

第二は、彼が教勢普及の布石とするのには、やはり住所の固定した人々を基本と考えているのであるが、その人達として、

「追々全權大使御帰朝の後、果して苛酷の挙動も在之候節者、家族を携居候輩は殆ど当惑の至一

と考えられ現に彼等のなかには、外人宣教師館にもぐり込もうと、宣教師に愁告する状況から、危惧される抑庄と、それえのまことに力弱い対応に不甲斐なく思うことである。

第三には、教部省より派遣された説教師達の反キリスト教攻勢に憂念の去らないことであることを安藤劉太郎に告げている。それはそのまま七月廿八日付報告として、通報されたわけであるが、大きな困難におつつかっていたとしてよいであろう。

そうした長老小川義経に動揺は続いた。それは東京の某より故郷千葉県に住む彼の親族佐久間帯刀に送られた書状に、バラヤタムソンは風聞の頗る悪い人物であるので、彼等とつきあっていることから、「何様之急難突起候哉も難計」という忠告が認められてたわけであるが、佐久間は早速人を遣して、小川にこれを内報したところ、「小川も一時愕然」とし、バラヤタムソンに懇々と説得されて「昨今は漸く一心安着」に及んだと、八月十五日付報告(安藤)になされているのが、それである。この月の二十日に横浜に神戸長崎辺の外

人宣教師、さらに東京からも相寄って、協議した主題については、前述の通りであるが、小川長老が意識する後退、衰漸を否定し、新機軸を打出して、開拓の歩を進めてゆくためにも、各外人宣教師並に教会員の衆議が必要とされたわけである。宣教師の合同会議は、この様な要請のもとになされたと見てよいであろう。

ついで、九月五日付報告(正木)によると、この月の十七日に長老・執事を撰挙することに決定したと報じている。それは、タムソンは東京に出て(彼は既に明治二年より東京に出て、築地に住み、三年には和歌山藩一月掃に招かれ、翌四年には各藩欧米視察者の連弁として欧米に赴き六年)長老小川義経も東京に引越すので、今一人別選挙が必要であるとし、執事も従来竹尾録郎がつとめていたが、今年の六月頃から、彼も東京に出てしまつて進村漸がこの代理をつとめていた

が、彼も近く故郷に帰るので、竹尾はそのまま東京の執事にし、横浜の執事を別に選ばねばならぬと伝えている。いうまでもなく、これは日本基督公会の組織的拡大であつて、横浜公会の支会が東京に生まれる推移である。(猶東京基督公会の設立は明治六年九月三十日である)しかも、謀者の報告に、「竹尾録郎を其まま東京の執筆と致置度由」とあるのは、のち

の新栄教会、即ち、いまここでいう横浜公会の支会の淵源を見きわめるうえで、一つの資料を提供してくれる。なぜならば、明治六年九月六日の東京基督公会創設に関する「公会日誌」によると、執事の人撰を行い、篠崎桂之助、本多庸一が選出されたが、篠崎は固辞し、本多と決定したとある。

しかして、この謀者正木護、教会での桃江正吉は、この東京基督公会創立者の八名のうちに、名を連ねるわけである。(日本基督新栄史 教會六十年史)

さて、正木護はタムソンの帰朝、東京に留につれて、横浜から東京に移り、日々彼のもとに通つたわけであるが、やがて、プレスビ

テリヤンのカラゾルス経営の耶蘇教書肆の番頭として、明治六年三月二十六日から鉄炮洲六番地の書店のボーイとなった。

その間の記録は「鉄炮洲六番書庫日誌」と題するもので、雇われた三月二十六日から四月三十一日の一カ月余りに渉る毎日の丹念な日誌である。やはり諜者報告として、明治六年五月三日提出のものである。

例へば、三月廿九日の日誌を見ると

廿九日、漢洋廿五冊全五両三歩横浜教会の本田来求む。或る人力引、車を庫外に置き、おそれおそれ庫中を伺い見て、生に問て此書物私共にても求められ候やと云、生答て、誰にても求める事を許すと云、然れば「リードル」を求めしとして、価十五錢にて買たり、生彼に問、此本を買て何にするぞ、彼云、私に一人の娘あり、親父は人力を引ほどの賤しき身なれとも、何とそ娘には洋学を勉強させ、追々女教師となし、学校の一つも領するようになしたしと云、依て住所姓名をも尋置んと思ふ中、客ありて、忽ち人力を引去る、実に開化は何れにあるか可思。

とあり、明治の鬱勃たる開化精神、あるいは布教伝道の対象となる当時の日本人の志向を窺いうる点で極めて興味深いものである。

また、四月十一日の日誌によると、

十一日、漢訳六十三冊、金七円三歩、仙台宮城県下の老人年令五十余と書生年令廿才余と兩人にて求む。老人書を売却して、大に喜て云く、近來県内に是等の教蔓延して、老若共知らざるものなし、国元にて聊か小冊の訳書などは見たれとも、未だ読まざる本多し、若輩共却つて種々の書を読んで、我輩の不知を責む。今幸に此書店の開たる事を聞しゆへ、充分に書を得て、之

を学び、また他を誘引せんと欲すと欲び語る中、傍に高知県士族とて年廿八九斗の人來り、此老人の咄を聞、大に啜詰して云く、先生何を以て、此教を善良の法と云哉、また学ひ得て、人を誘引すれば、何の益あると思ふ哉(下略)

と、以下兩人の争論がながと続けられ、専ら、高知県士族某の破邪論がのべられる。一篇の対話、破邪論の展開にあまりに妙であり、素材もとのつているので、かえて諜者の誇張・潤色を思わせる程である。

以下、日誌に掲載されている項目を便宜的に分類し、鉄炮洲六番書店の状況その他を概観すると、次の如くである。

\* 購入者(来店者) 一覽(猶数字は来店者延回数)

○外人宣教師

フルベッキ夫婦(2)、ゴープル夫妻及び娘兩人(1)、タムソン、ギューリックの弟(1)、バラ(1)、ブラオンの妻(1)、支那宣教師某(1)、

但し、タムソンは同じ築地地内に居住し往来頻繁なり。

○一般(別掲)

横浜教会の本田某(庸一)(1)、車力某(1)、石黒金蔵(元ボーイ)(1)、松平忠孝(元旗本か、松平伊賀守三男、フルベッキ門人)(3)、静岡県団幸堂某(1)、静岡県佐久間某(1)、宮城県人塚某並子息(2)、宮城県某(1)、宇都宮某(1)、千村五郎及教子(2)、木更津真人某(1)、若松県士族某(3)

○書店関係

越前屋(2)、芝山口屋(4)、芝土屋忠次郎(1)、小石川虚心堂飯

島某(1)

○書生

福沢塾生(8)、<sup>ニコライ</sup>尼過頼塾生(2)、長沼塾生(1)、築地本願寺内学僧(8)。

○タムソン関係の往来

某女(1)、某男(6)

\* 購売書籍一覽(数字は冊数)

○バイブル(5)、トックス・ジーザズ(1)、耶穌之言(1)、天道湖源(100)、ルードル(リーダー)(1)

洋書本(8)、漢訳本(1360)、漢洋本(364)、訳本(947)、和漢洋本(156)、和訳本(3)、不明(56)。

\* 売却代金(單位が単一でないので単に合記す)

六十円三十一方九十銭と九五両四十二朱四七歩一一〇文

\* 安息日タムソン説教来会者數

○三月三十日 五十余人堂内國人七十余人

○四月六日 (この日小川廉之助と横浜公会堂行)

○四月十三日 四十余人堂内國人五十八人

○四月廿日 六十余人堂内七十余人

(但し堂内説教はブラオン行)

○四月二十七日、八十余人堂内八十余人

これによると、期間は、わずか一カ月余であるけれども、外人宣教師の往来や、洋学志望の庶民階層から、もと旗本子息まで、京浜を中心としたキリスト教のなかで、殊に中村敬宇の啓蒙による静岡県下、仙台を中心とする東北諸藩の動向や、東京近在の家塾、学生生徒達等、その階層は、殊に有識者に限定されず、広汎な領域にわ

たっており、初期の対象は別段中産階層以上に限定されるものではないこと、及び購入書籍からみれば、バイブルは、概ね、上海を経由していたわけであるが、漢訳本が圧倒的に多く、やはり漢学の素養を、聖書の仮名版上梓にかかわらず根底としていたこと等特徴としてあげられよう。

#### 四 結びにかえて

譯者自身が受洗し、教会の重要なメンバーとなりながらも、やはり、彼等には、最後のに踏切れぬ限界をもったために、宣教活動における外国人宣教師の動きと、日本人の殊に教会長老、あるいは執事との間に、どの様な形の教会を形成してゆくか、そういう突込んだ考察は少なく、外人宣教師と日本人長老とを疎隔させる様な、ちょっとしたトラブルであるとか、日本人側の外人宣教師に依存しようとする動向等、日本人側の教会設立や、布教伝道に関する、積極的な、また創造的なうごきについては、報告書の性格としては、当然特に重大な事項として報告されるはずでありながら、ほとんど伝えられておらず、むしろ、あまりに評価せず、外人宣教師に誘導された、どちらかといへば消極的な動向の報告が多いわけである。しかし、その事實は多くの日本人の態度がそれに近かったとしてよいであろう。

その点、例えば、日本基督教會史(山本秀雄著)に、日本基督教會の設立に関して、「此の新教會は、その組織に於て長老教會の制度に則りたるも、此の派にぞくせず、又改革派にも附かず、教會政治の点においては、外国の何れの教派にもぞくせざる日本独立自治の団体として建設」(同書三)し、とのべ、また、「初め日本基督教會が

無教派主義を標榜して建設せらるるや、その快挙は、各派宣教師等に深刻なる印象を与へたるものの如く、公会設立後六ヶ月、即ち明治五年八月横浜に会合せし、第一回宣教師会は、日本に設置すべき基督教会の組織問題を重大なる議題の一となせり」(前掲書三八)とのべて、教会設立にあたっては、日本人の主導的な、積極的な動きと、意嚮が充分もり込まれたような叙述であるけれども、当時教会の奥深くはいり込んでいた一批判者は、その様にはみていない。専ら、バラヤ、キダー・ピヤソン等(当時旅行中)の真摯な伝道のうちに進められたものであり、長老小川義綏の謀者への告白は、会員は語学習得のための学生であつて、浮動性が強く、一方家族ぐるみの信仰家も、政府による苛酷な弾圧があるかもしれない事態を思つては、外人宣教師の庇護下に、かくれ込もうとする等、あまりに、外人宣教師達の持つている学問を習得しようとしたり、あるいは特権を享受しようとしたりする傾向の強いことを歎ずる程であつた。また第一回の宣教師会議は、外人宣教師達が日本人による無教派的教会の設立に刺戟されて、開かれたものでなく、日本人の動向は、いわゆる受益者性格を脱却できず、その消極性の故に、次第に崩れ、脱落していこうとする教会にテコ入れの必要を認める日本人長老の危惧と、多くの宗派の乱立するなかで、宣教師グループの相互関係から、開催されたものであつた。かかる点から言へば、キリスト教の眞の根が日本におろされるためには、設立されていつた横浜公会、東京公会等は、そうした受益的な、消極的なものから脱却して、謀者がこまごまと報告したような、名もない庶民のなかから再び再編成されることが必要とされたのである。

換言すれば、謀者報告書から見られる当時のキリスト教界の特徴

を、教会(公会)設立とその發展に絞つて、考えると、横浜公会は、日本人が、日本独自の教会形式を考えた形跡は極めて薄弱である。そうすれば、むしろバラ(プレスビテリアン)一色の傾向を強くした筈であるが、公会は、わずかに長老制をとつたにとどまつた。しかして、無教派的であつたのは、当時多くの教派が介在し、それがたがいに牽制しあつて、そのために一教派独走の形態を不可能にさせたのではないか、しかして、第一回の宣教師の横浜に於ける合同会議は、教勢伸張という外人宣教師、日本人長老の相互要請によつて、開かれたのであるが、それも、横浜公会という既に形成されていた土台の上に連合会議の性格を不可避にし、諸教派の妥協的性格をもたざるをえなかつた。そこに、ある教派に偏せぬ日本基督公会の成立、發展が傾向づけられ、初期各宣教師間の協調が生まれたと見るべきであらう。

したがつて、一たんキリスト教が解禁されると、各教派別のうごきは、謀者の報告の様に急に活発化したわけであつたが、そのころになると、既に日本人で各地伝道に尽瘁する信者も次第に成長・確立しつつあつたとみてよく、さらには、秩祿処分、地租改正の進捗に伴つて其後の教会設立・(形成)發展のタイプは又別とならざるをえなかつたが、これは本稿の問題でないので、一応これで擱筆する。